

感動の前夜祭 「鬼の目にも涙だよ」

9月4日、両組は前夜祭を迎えた。下組は自然休養村管理センター駐車場、上組は役場駐車場それぞれ40年ぶりに復活させた自作の山車をお披露目した。

ライトアップされた下組の山車。見事にそびえる2体の鬼が目を引く。その制作に仕事をなげうって取り組んだ下組幹部の前川美代志さん(46〓白井)に尋ねてみた。

「出来栄はどうかですか」。彼は山車を見上げながら満足そうに言った。「鬼の目にも涙だよ」。



管理センター駐車場では下組が豪快な山車を披露した。地区の人たちも心から喜んだ

両山車組の人たちからは、できることはすべてやった。悔いはない。そんな思いが伝わってきた。前夜祭は、昨年にも増して、多くの村民で盛り上がった。

両組頭とも「地域の皆さんの協力がなければできなかった」と陰で支えてくれた地域の皆さんに感謝していた。



役場駐車場で自作山車をお披露目する上組。ライトアップされた山車に人々が集い完成を祝った

出発した。一人ひとり笑顔と自信に満ちた表情で目抜き通りを練り歩いた。まつりのまつりの中日、上組は太田名部と特別養護老人ホーム「うねとり荘」に山車のお披露目

に行った。

「うねとり荘」では入所者の皆さんが1時間も前から外に出て、山車の到着を待っていたという。

入所者の皆さんを前にマイクを握った三船彰久副組頭(43〓緑区)は「皆さん…」と言ったとき、感極まり言葉を失った。彼は振り返る。「自分たちが一生懸命作った山車をこんなにも心待ちにしてくれて。その

ことがうれしく、頑張ってきたことがあった。そう思ったら…」。

ここにも一人、山車作りに向けた熱い男がいた。

帰りぎわ「きれいでしたよー」。「来年も来てください」と、入所者の皆さんは涙ながらに手を振り山車を見送っていた。その光景に「うねとり荘に来て本当によかった。来年も必ず来よう」。中村組頭は満足そうに目を細めた。

老人ホームで 山車をお披露目

まつり初日の9月5日。みこしや普代中学校の中野流鶉鳥七頭舞の行列に続き、2台の山車が普代駅前を

いつの時代もまつりを愛する若者がいて、それを支える地域の人々の力があつた。

しんどかった でも、作ってよかった

20代から50代までの異業種の人たちが、仕事が終わってから、ましてや土日返上で「山車作り」という、ひとつのものに向かって5カ月間、必死に歩み続けた。

意見が合わずぶつかることもあったという。しかし、それはまつりにかける熱い思いにほかならない。

上組の事務所にはさい銭箱が置いてあった。事務所に集まる人たちはそのさい銭箱に500円、千円を入れる。不思議に思っていると、それはその日の各自の飲食代だという。

そこには「自分たちの飲食代に、大事な寄付金は使わない」という鉄の決まりがあつた。

報酬が出るわけでもない。食事が出るわけでもない。深夜腹がすくとカップメンだ。ある意味家庭も犠牲にした。

それでも両組の若い衆は「今までに経験したことのないしんどさでしたが、山車を作った本当によかったです。来年も必ずやりますよ」と満面の笑顔を見せた。

彼らをここまで突き動かす「まつり」とは一体何なのか。

「まつりは『ばが』になん若いもんがないないば、できないもんだが」と言った野田口光徳さんの言葉が頭をよぎった。

歴史を築いてきた魂は 未来へと引き継がれる

さまざまな形、始まりの違いこそあれ、ほとんどの自治体や地域にまつりは存在する。そしてそこには必ず共通点がある。例えば、豊かな実りを迎えば豊作を祝う。実りが少なければ豊年を願う。神仏、祖霊に感謝し、無病息災・家内安全・商売繁盛・豊年満作を願う。

つまり、まつりは人々の心のよりどころとして生まれ、心の支えとして続いてきたのだろう。老いも若きも皆がひとつになつて1年の苦労や喜びを分かち合う。まつりは神事で

もあり娯楽でもあるのだ。

「八幡宮まつり」から「三社祭」そして「ふだいまつり」へ。時代とともにその形、内容は変わってきた。村のまつりもそうした歴史の上に今がある。

山車組の5カ月に及んだ挑戦は、誰かのためではなく、みんなのために。であり、何よりまつりを愛する自分のためなのだ。そう考えるとそこには村づくりの原点が潜んでいるように思えてならない。

今年のふだいまつりは、例年以上の盛り上がりを見せ、幕を閉じた。9月末、両組が心血を注いで作った山車は人形や装飾が取り外され、その保管作業を終えた。山車は静かに来年の出番を待っている。

立派に出来てました



三上 ギンさん (84・中央区)

下組も上組も皆さんが頑張ってくれたようですよ。借りてきた山車に負けられないよかったですよ。昔と比べても立派に出来てましたあ。来年も頑張ってくださいー。

山車がきれいでした

歩くのが疲れたときもあったけど、頑張った山車を引っ張りました。



宮田 綾さん (8・緑区)

ライトをつけた山車がきれいでした。高学年になったら、小太鼓をやってみたいと思いました。

取材を終えて

昭和13年、村で初めてまつりに山車が登場した。当時としては画期的な出来事だったに違いない。戦時中、中断を余儀なくされたものの、先人たちはまつりを復活させた。それは戦後の激動の時代を生き抜いていくためにも、人々がひとつになれるまつりが必要と感じたからではなかったのか。

40年ぶりの自作山車の復活を機に、村のまつりの歴史をさかのぼり、まつりの「今」を追った。だが、当時を知る人も数少なく、資料に至っては皆無の状態だった。しかし、さまざまな困難を乗り越え、村のまつりは脈々とその歴史を重ねてきたことだけは紛れもない事実だ。そしてそこにはいつの時代にもまつりを愛する熱き若者たちがいて、それを支える地域の人々の力があつた。

1枚の写真を手掛かりにたくさんの方々に遠い記憶を思い起こしていただき、貴重なお話をいただいた。事実どこまで迫ることができたかは残念ながら定かではないが、5カ月に及んだ両組の山車作りには、地域づくり、村づくりの原点を垣間見た思いだった。人が必死に何かを目指すとき、そこには必ず道が見えてくる。取材にご協力いただいた皆さんに感謝したい。

■付記(敬称略) 根岸弘(三船仁太郎の長女)、三船仁太郎(中央区・三船隆久の祖父)、及川玄雄(同・及川幸子の父)、三船泰弘(仁太郎の長男)、林下市太郎(上区・林下和弘の祖父)、川向幸作(旭日区・川向文由の父)、中野四郎(同・中野妙子の義父)

■写真提供(敬称略) 根岸俊男、三船孝子、三船朋久、嵯峨初三郎、宇部治郎